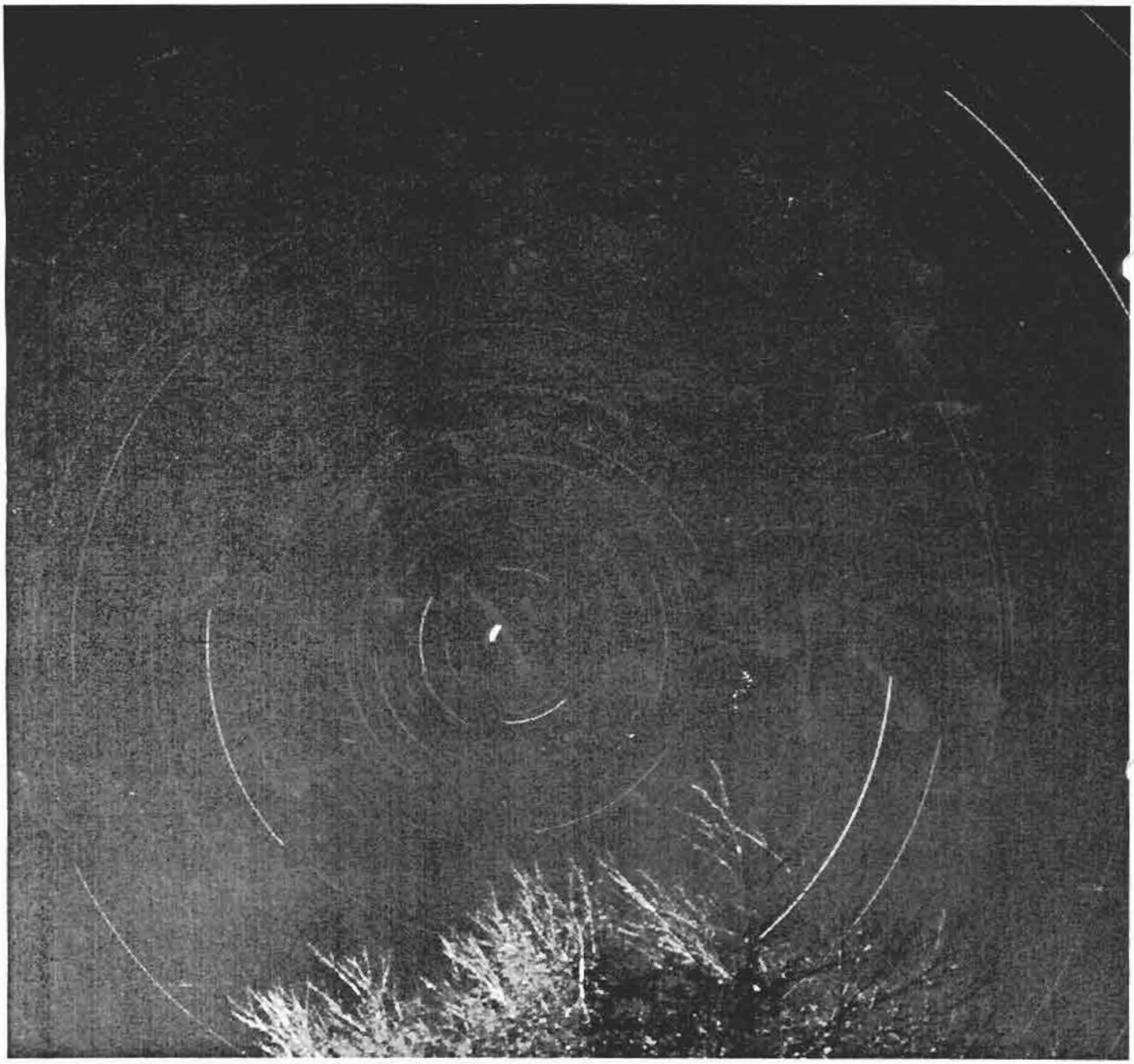
中川根ふる里通信

＝第54号＝

編集・発行・モアラブ中川根
連絡先 〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾 859-6
中川根ふる里通信係
TEL 0547-56-0015
郵便振替口座 00870-4-81556



星の軌跡.　冬の北の空　円の中心北極星
シャッター開放120分

この瞬間,悠久の時の流れに

昨年末、静岡新聞社より「新聞に見る静岡県の一〇〇年」が発刊されました。一九〇〇年（明治三十三年）～一九九九年までの一〇〇年間を五〇〇ページ弱にまとめられたもので、一年に与えられた割合は四～六ページ、内容も一世紀の重みをずっしり感じるものでした。

その中で、中川根に関係がある記事を拾ってみました。大井川上中流域とかつて密接なつながりがあった北駿、北遠の村々の記載が思ったより多いな、と感じました。静岡県の一寒村の二十世紀をふり返る期会になれば、と載せてみました。（左記――は県、国全体の背景）

明治43　10月18日　川狩り人夫八名が溺死。大井川上流井川村田代い渕沢で島田町紅林専蔵の経営にかかる木材川狩中、人夫二十三名が筏船で下っているところ増水の為に岩石に衝突し、船は破壊され、二十三名は水中に落ちて激流に流され、内十五人はかろうじて岸に泳ぎつく。

12月15日　大井川通船組合、川狩り廃止を求めスト。

――この年、5月19日、ハレー彗星、地球に大接近、流言広がる。

44　3月30日　秋葉寺（しゅうようじ）と秋葉神社との係争地訴訟、東京控訴院、寺側請求棄却、神社側勝訴

――鈴木梅太郎博士オリザニン（ビタミンB1）を抽出

大正6　2月16日　大井川通船水夫数十人賃上げ要求スト。

3月15日　山路愛山死去（高木壬太郎盟友）

7、6月10日　貴族院議員に中村円一郎氏当選

――米価騰貴……細民激増、死の寸前、米騒動検挙三二六人

8、8月12日　王子製紙気田工場（春野町）職工一六〇余人賃上げスト

9　――第一回国勢調査、静岡県人口は一五四万人（自動車一九四台）

10、7月6日　駿豆鉄道、島田―藤川（本川根町小長井）間の営業許可。（大井川鉄道前身）

大正11、10月9日　大井川の飛行艇試運転、通船組合の幹部、大石覚太郎、秋田松次郎外数名が発起人となり近く大井川通船株式会社を設立し、第一期計画として島田家山間、第二期計画として島田千頭間十七里の運行に使用する。飛行艇は長さ七間（けん）、幅一間、水深一尺、トラブにプロペラーを有し、七十馬力の発動機を備え、旅客二十余名、一時間十五哩（マイル）以上の速力あり。

12　6月20日　右、大井川飛行艇の創立発会、島田町向谷―下川根村家山間を運航

――9月1日、関東大震災、M7.9、死者行方不明十四万二八〇七人

14　――お茶のビタミンC発見。お茶の中に壊血病に特効あるビタミンCを多分に含有しているということが、理化学研究所の三浦政太郎博士の手で発見された。なお、眼の角膜乾燥症を防止するビタミンA、脚気の治療剤ビタミンBもお茶の中にあるということを博士は苦心研究の結果発見。右のビタミンは我が国産のお茶のみあって、紅茶、コーヒーには少しもないから、我が国にとっては非常に幸福と言わねばならぬ。

三浦政太郎、掛川市生まれ、化学者、38才にて死去、夫人は三浦環さん。

昭和2、2月16日　大井川鉄道工事で朝鮮人夫が相愛会加入問題をめぐり乱闘、六〇余人金谷署に検束

5、10月1日――第二回国勢調査、静岡県人口は一八〇万二千余人。

10、6月28日　大井川電力発電所、上川根村（本川根町）工事場の朝鮮人工夫一四八人解雇に反対し、三〇〇人がスト、六月三十日、被解雇者に帰国旅費増額支給で妥結。

15、2月11日――紀元二六〇〇年建国祭、参加者四二万六五二一人

――この頃より、紙上ほとんどが戦時色となる――

16、――全校女児がモンペ通学、国民学校で入学式、米配給、十才以上二合三勺、全中学校に報国隊、県下一斉に食用油切符制、児童に甘藷の一坪栽培奨励、七分つきで節米、お菓子の配給統制、せめよ地　せよ、県が後押し

昭和16 12月8日 ――日本軍、ハワイ真珠湾空襲、マレー半島に上陸、対米英宣戦を布告

17 3月21日 中川根村の満州移民先遣隊壮行式。四月川根開拓団、一四五戸六九三人黒龍江省に移民

川根茶として有名な榛原郡中川根村の大部分が満州移民を決定し、茶業界から注目されている。すなわち同村は戸数九百戸、五百町歩の耕地を有し、大井川の中流に沿い、古くから川根銘茶の産地として知られていったが、最近の製茶規格の統制実施によって同地方の茶業も採算がとれず、村民が苦境に陥りつつあったが、村当局も更生策を研究の結果、助役板谷壮吉氏(34)が昨年五月から十月まで満州建設勤労奉仕隊に参加、六ヶ月間の現地体験と視察によって、大陸開拓の重要性と有望であることの見込みがついたので、村民を説得した結果、いよいよ同村戸数の約三分の一の二七五戸を大陸に分村入植せしめ、母村の経済更生をはかると同時に率先、大陸に進軍することになったものである。

分村方法としては、本年度十五戸、十七年度三十五戸、十八年度二十五戸、合計七十五戸を第一期として送出、奉天省興京、県富士郷開拓団に合併、十九年度から二十年度にわたって二百戸の分村を行い、更生に邁進することに決定し、二十日、開拓民送出講演会並びに総会を開いて村民の協力を求めることになった。本年度送出の十五戸は二月上旬引佐農学校拓務訓練所で一ヶ月の拓務訓練の上、三月中旬、現地に赴く予定（一月十三日記事、原文のまま）

18 ――大井川堤防で松脂採取、旅館や食堂は玄米一色、敵性思想の撲滅運動、東海道筋の松並木伐採、叩き壊せ青い目の人形、全中学校の野球部解散、全学徒夏休みを返上、県甘藷混食を断行

19 12月8日――東南海地震、中西部で大被害

20 ――B29百数十機県下に来襲、広島に新型爆弾投下、終戦…四事二百万県民に訓示、岳麓に米進駐軍八百名、静岡・浜松に買出し列車

昭和21 ――信念を失った日本人、メーデー復活、失業者に戦を引き揚げ同胞に迫る飢餓、民主天皇、県下を御視察、壊れゆく児童の世界…盗みなどの犯罪激増

9月24日 千頭奥に引揚者の理想郷…県下引揚者四万一千人内就業者二割、残りの人は売り食い生活の為海外引揚者の理想郷を建設することになった。この事業は東川根村の帝室林野局千頭出張所梅地御料林の開拓で、五十家族二百五十人が自立開拓従事する。払い下げ面積は約二百町歩、同御料林は県下に名だたる原生林、杉、檜、梅などが自生しており、これらは工場建設資材として活用される。

22 10月1日――国勢調査実施 県人口 二三五万一六三〇人

24 10月30日 大井川鉄道が電化、十二月一日運行開始（同年五月一日、東海道本線静岡・浜松間の電化完成）

25 ――小・中学校の長期欠席者二万人＝原因トップ貧困(44%)病気(34%)怠惰は2%で経済的理由で登校出来ない生徒児童が三三年当時より二十倍

25～県下赤痢、疫痢流行 死者 25年 四五三人、26年 四〇〇人、27年 三五九人、28年 三五三人、29年 二〇四人、30年 一四七人、31年 一四四人、33年 八一人、34年 64人

28 県下名物ベストテン＝行事の部に徳山神社の火の祭が九位となる。

32 9月15日 井川ダム完工式、中部電力の大井川水系第七番目の井川発電所（最大出力六万二千KW）五ヶ年、二百四十億円の工費を投じての大工事

33 4月6日 大井川筏乗組合、大井川電源開発の影響を受け解散式

35 11月16日 川根町家山で大火、全焼一二八戸

40 ――山地傾斜地の開発でやぶきに種が植えられる。

41 中村光四郎氏死去、八二歳、藤川、県農事試験場茶業部子孫み教師となり研修生を育成、子孫み流派川根揉み切り流創始

43 2月20日 金嬉老、清水市で二人射殺、本川根町寸又峡に人質を取って立てこもり朝鮮人差別を強調、三四日逮捕（金嬉老事件）

51 7月9日 大井川鉄道金谷―千頭間にSL運行

平成2 10月1日 大井川鉄道井川線にアプト式鉄道開通

平成2年　千頭国有林の伐採禁止　林野庁東京営林局は三月九日、本川根町の千頭国有林の一部など約四千六百ヘクタールを「森林生態系保護地域」に設定することを決めた。植物学、自然生態学的にみて価値の高い同地域の天然林を自然のまま保護する狙いで、今後、木材生産を目的とした地域内の樹木の伐採は一切禁止される。同地域の設定は、高知県石鎚山周辺国有林などに次いで全国で三ヶ所目。

森林生態系保護地域に設定されるのは、南アルプス光岳周辺の本川根、水窪両町と長野県南信濃村にまたがる国有林。このうち、光岳を中心とした本川根町内の約千八百ヘクタールを「保存地区」その周辺を「保全利用地区」として禁伐地域とし、保存地区では山火事の消火などの例外を除いて、人の手を加えることが禁止される。

11・9月7日、金嬉老受刑者を仮釈放　三十一年ぶり、韓国・釜山に帰る。

以上、になりました。我が中川根にもこの百年の間には、様様な歴史（出来事）があり、ふる里通信第21号から23号にかけて、ムラの歴史として紹介致しました。その様な中、昭和十七年三月二十一日の中川根村の満州移民関係の記事は、唯一静岡新聞紙上に大きく取り上げられた事項です。この事につきましてはふる里通信第18号から第22号にかけて、五回に渡り特集「満州移民」を二十三ページ組ませていただきました。中川根村の歴史として、忘れる事の出来ない事であったのだと改めて感じた次第です。

川根地域が特産品のお茶と大井川に関わって来た事も判りますし、奥大井の山々が、徳川幕府の御林から明治からの御料林（寸又川上流部）と民有林（大井川上流部）に変わり、やがて、御料林は国有林に変わり、昭和四十年代の大規模伐期も終り、森林生態系保護地域となりました。そして同地域の中には環境庁指定　大井川源流部原生自然環境保全地域（一二一五ヘクタール）が設定されました。これは全国で五ヶ所、本州では唯一、大井川源流部が指定されています。

昭和三十年代後半、中川根町を起点とする南赤石林道も、構想としては、大札山、山犬段、黒法師岳、ロクロ場山を経てやがて南信濃村へ通ずる大基幹林道になる、二千メートルの山岳ハイウェイを夢見た時代もありました。

一九八〇年、当時は西暦が重んじられていた時代でもなかったと思いますから、十九世紀末、云々を口にする人もすなかったと想像します。むしろ、和暦紀元二六〇〇年の方が歴史的区切りの対象になっていたのではなかったかと思います。

今、ふる里中川根は高齢化率三〇％弱の、かって迎えた事のない高齢者が住んでいる地域となっています。とはいっても、年齢を感じない元気な人達の住んでいる町ですから、目に見えた悲しいはありませんが、子供達がいなくなった事は、とてもさびしい事です。しかし、日本の国全体が十五年～二十年後には迎える社会であるとするならば、今、元気な内に少しでも将来に残す何かをしなければならないと思います。なかなか、策は浮かびませんが、消費オンリーの社会から質素堅約の世界に移動しなければならない事だと思います。

報告

三月十日午後三時頃、下泉地区内の道路わきから出火し、（河内川林道、小竹手前）大規模な山火事となりました。不動の滝の裏山から横沢付近の山を焼き、翌日午後五時頃鎮火しました。県の防災ヘリコプターによる消火、翌日は愛知県、山梨県からも防災ヘリが出動してもらって空中消火されました。焼失山林は約五十ヘクタール

ふるさと夜話第二十七話

小学校卒業式の俳句の答辞と同級生杉本知峯の名句

原田耕作

大正十年三月(一九二一)私は同級生十七人と共に下長尾小学校六年生に進級した。その時の教科書、尋常小学読本巻十一(現在は国語)の第一課は「吉野山」であった。

吉野山霞の奥は知らねども
見ゆるかぎりは櫻なりけり

という和歌が第一課の冒頭にあった。

吉野山は櫻の名所であることを知らない人はないと思う。それと共に吉野山は後醍醐天皇の南朝の悲史に深く関わることも知らない人はないと思う。

花はねてよしや吉野のよし水
まくらの下は石走る音

このへらしとあねて思へばあづさ弓
なき数はいる名をぞとどむる

先の歌は後醍醐天皇の御歌。後の歌は南朝の忠臣楠正行が決死の士百四十三名の名字を如意輪寺の壁に書き連ねて出陣した時の歌である。

前記三首の和歌と共に二句の俳句がある。

これは
六年生ーーとばあり王花孔の吉野山

歌書よりも軍書よかなし吉野山

私共六年生は教科書の読本に依って初めて和歌と俳句についておぼろげ下ら知ることができた。当時の小学校の読本は、むずかしい漢字が一杯に使われていた。文章は文語体が多く、口語体は少なく、漢文くずし字、手紙の候文まで載せられていた。

前記和歌の王(り)ま(に)こ(か)ま(こ)ま(これは)等の昔の文字は、昭和生まれの人達が全く知らない文字であると思う。

その新学期に岡本阪雄先生という校長先生が単身赴任して来られた。三十六歳とか、若い校長先生だった。頭は角刈り、チャップリンひげをはやして、常に詰襟の黒い学生服みたいな服を着て居られた。

この岡本先生が三学期に入った綴方の時間に「今年の卒業式には皆に俳句を作ってもらって、俳句を答辞としたいと思う。先生が教えるから俳句の勉強もしてもらいたい」と言われた。これには六年生十八人、びっくりした。

俳句といっても、読本第一課の吉野山でチョッと俳句というものを読んだだけである。しかし、先生の言葉に逆らうわけにはゆかない。できても、できなくてもやってみよう、と一同決心して以後綴方の時間には岡本先生の教えに従って世界一短い詩という俳句作りに脳味噌をしぼった。

最初私が作った句は

「月が出て、小便かりも、こわくなし」

という句だった。昔の農家は、どこの家にも長の入り

答辞

村松史郎
北原準平
野崎令一
榊原利一
実崎　実
杉本福平
春沢好雄
蕗中保一
原田耕作
伊藤きぬ
田畑きみ
山田ますす
金沢けふ
大下しな
沢井ちづ子
池田えき
森　たか
大下トモ

卒業を祝ひて桜咲きにけり
いざ行かんおぼえし道は遠くとも
のどけさや桃咲く里に鳥の声
祝へ祝へ花はほころびそめにけり
梅笑い鶯鳴くや春のどか
六年の苦心や花の香も高し
別れてもゆめ忘めや師の御恩
すをいでて高く空とぶひばりかな
師の君にわかれて去るや西東
鳴く鳥の声そろうなり花の春
先生に御恩返しは忠と孝
卒業やなごりを惜しむ花の影
咲き盛る花に宿せり露の玉
花もある実もある今日の別れかな
あたたかやめぐみのつゆに桜咲く
お花見を兼ぬる卒業祝いかな
師に友に悲しき別れ花は咲けども
卒業や今日を別れに鳴くひばり

に近い軒下に、簡単な小便所があった。暗い夜は表へ出ることが恐ろしいが、月が出て、明るくなったため、安心して小便所へ行けた、ということだった。

二つ目の句は、

「月が出て軒のへちまの影がさす」

という句で、これはまず良し、これなら何人か答辞の俳句も出来るだろうと思った。

私は六年生の時の級友のノートを今でも持っているが、取り出して見て、俳句で苦労した六年生のあの頃と、教えて下さった岡本先生がしみじみなつかしい。

学期末になって、とにもかくにも私共の苦心の結晶である俳句らしいものができあがった。全く何も知らない子供であったのに、よくぞこれだけの句が出来たと、成人して後、感激の思い出となっている。

大正十一年三月二十八日、卒業生代表として私が答辞を読んだ。来賓のなかには前例の無い俳句の答辞におどろいた人もあったと思う。また何が何んだか判らない答辞だと思った人もあったと思う。しかし私共にとっては苦心の末できあがった俳句である。忘れることのできない思い出の答辞であった。十八人の俳句は上記の様なものであった。

（俳句の文字は先生が書いたまゝ通りです）

かくして私共十八人は下長尾小学校と

先生にお別れした。高等小学に進んだ者、奉行に出た者、不幸せにも二十才に至らず死去した者もある。行方知らずの友もある。戦死した友も一人ある。

それぞれ人世の歩みを続け、現在この世に生き残っている者は三人、男が二人、女が一人。私もその一人で、九十才になった。現在この原稿を書いていて、亡き友を思い、昔を偲び懐しいかぎりである。

同級生のうち、社会人となってから俳句に一生を精進してくれた友人が一人ある。平成元年十一月、八十才で世を去った杉本知峯である。本名福平。川根で俳句に趣味を持つ者として杉本知峯の名を知らない者は無いと思う。

日本の有名俳人の選で数多くの賞を取っていることは、杉本君の遺稿集『吹けよ春風』を読めばよく判る。なかで特に優れた作品は、昭和五十六年九月、全国俳人協会主催、朝日新聞後援の第二十回俳句大会に応募して、俳句大会賞を獲得した左記の作品である。

竹を伐る伐らざる竹も騒がせて

一読心打たるる名句である。まさしく杉本知峯は川根の生んだ俳人であった。

私共に初めて俳句という文学を教えて下さった岡本先生は教職を去った後、郷里の小笠郡比木村の村長をつとめたと言う事であった。　おわり

※原田さんに「原稿の字が読めないから」と電話をしたところ「私はふだんの時の綴方のノートを持っているからお教えしましょう」とのお話が来ました。ご紹介します。

原田さんが小学校六年生迄に習った平仮名

あ安あ
い以いい伊い異い
う宇う
え衣ええ江え
お於お
か加かか可か
き幾きき起き
ち知ちち期ち
く久くく
け計けけ
こ己ここ古こ
さ左ささ沙さ
し之しし志し
す寸すすすす
せ世せせ
そ曽そそそ
（そそろを読みちがえます）
た太たた多た
ち知ちち千ち
つ川つつ（川もつと読みえる人はまずないでしょう）
て天てて
と止とと
な奈なな
に仁にに
ぬ奴ぬぬ
ね祢ねね年ね
の乃のの能の
は波はは者は
ひ比ひひ
ふ不ふふ
へ部へへ
ほ保ほほ
ま末まま
み美みみ見み
む武むむ
め女めめ
も毛もも
や也やや
ゆ由ゆ
よ与よよ夜よ
ら良らら
り利りり里り
る留るる
れ礼れれ連れ
ろ呂ろろ
わ和わわ
（王をワと読みます）
ゐ為ゐゐ
を遠をを
ん天んん
（遠を同と読みます）

特集　南アルプスと大井川　その2

大井川源流を訪ねて（其の三）

藤川相村一雄

畑薙第一ダムから、二軒小屋に向かう専用道路は舗装されていない。小さな穴がボコボコとできた大変な路面だったが、少し慣れてくると源流の聖地へと向かう林道にはこの方がふさわしいと思えてくる。会員の皆さんも『昔はこんな道ばかりだった。懐かしい……』などと、車の揺れに快感すら感じているようだ。湖畔に添ってしばらく平坦な道が続いている。

この道は昭和四十年代に二軒小屋まで開通したと言う。『私が三十年頃、初めて二軒小屋に入った当時は、山梨県の早川町新倉から転付峠越えがルートで、そちらから入った。畑薙第一ダムから道路は途中までしかできていなかった。確か、四十年代になって完成した。当時中川根からは二軒小屋まで二日間、往復四日の日程だった』（千頭山の会、会長高田晴男氏談）

井川湖は実にきれいだったが、この畑薙の湖にはがっかりする。泥色に濁り、透明度0、遠くは薄墨をとかしたような水が対岸まで続き、水面より他になにも見えない。周囲にどこか大量に崩壊があったのだろうか？入ってくる流水は澄んでいるのに、湖底に何があるのだろうか？病んでいるような湖に見えた。

対岸（右岸）に信濃俣（しなのまた）、光岳（てかりだけ）、大根沢山、となだらかな山並が見える。その南背後は明神谷だろうか。ここには、江戸中期、江戸の木材需要をささえる為、原始林初の皆伐（かいばつ）の歴史がある。

ミカン船、材木商で一躍名をあげた紀伊國屋文左右門が杣人（そまびと）を引き連れてこの地に入ったのは、元禄五年（一六九二）で、しかも紀文は自ら陣頭指揮を取ったと言う。当時江戸商人が直接藩内に入ることは異例のことであったようだ。本来ならば駿府の御用商人、松木新左衛門の弟郷蔵の手のもとで伐採、流送して江戸商人の紀文等に売り渡すのが通常であったようだ。紀文自らこの地に入ったことは、大きな魅力があってのことだろう。〔松木屋郷蔵と共同事業であった、と記載されている〕

紀文は上野寛永寺の御用木請負、江戸城本丸御用木の名のもとに、明神谷、信濃俣、更に奥地の赤石沢、椹島（さわら）へと伐採していった。これら御用木流送は慶長十九年（一六一四）寸又川から初まり十回にも及ぶ。

流送は大井川を川下げ→島田向谷水門、後には木屋水門を通り→栃山川→木屋川に入り→焼津和田湊（小川港）で船積みされて、江戸市場へ回漕された。（大井川周辺における木材史より）、この川下げは、昭和期川狩りと違い、自然の力をたよりだったので、川原には沢山の木材が散乱していたと考えられる。その木材拾得横領について、厳しい掟があり我が郷にそれにまつわる逸話が伝えられている。

NHK大河ドラマ『元禄繚乱忠臣蔵』を昨年暮に（一九九九）見ていたが、紀伊國屋文左衛門が派手な衣装を身に纏い遊興にふけっている。元禄十五年十二月十三

日、討入り前日、岡島忠嗣は、赤穂浪士が軍資金を使いはたして、宿賃は払えず、食事もままならぬのを、見兼ねて紀文に無心。〝百両持っていけ！〟と言われたが五十両（約五百万円）もらい受け頂っていた。――この小判の大半は大井川奥山で儲けたものだろうか、と思えてならない。元禄五年から十年目であり、まだ椹島あたりでは伐採していたのではないか、と想像される。これはフィクションとしても、余りの偶然で複雑な気持ちとなった。横道にそれてしまったので、もとにもどる。

奥地へと進むにつれ往き交う車もほとんどなし。湖が続いていた前方に車が二、三台停まって、道路工事をしているようだ。すると車に乗っている者は全員降り、空車にして通るよう指示されたので暫く作業が終わるのを待ちながら、私たちは五十メートルほど歩く。この道を時間と体力に自信があったら、ゆっくり歩いてみたい。爽快で、もっといろいろなものが見えてくるだろうと思えた。

畑薙大橋を渡り右岸を走る。どの辺りだったか定かではないが、大きな看板が立っている。『東海パルプ社有林』の説明」のようだ。この辺一帯の山林は資料によると、

【東海パルプの創始者大倉喜八郎氏が、紙の原料〝パルプ〟の必要性から、この井川山林の二五〇〇ヘクタールの社有林を掌中に入れたのは、明治二十八年（一八九五）であった。御用木請負の紀文、郷蔵らが斧入れ（一六九二）してから、二百年過ぎており、大樹林となっていただろう。木材搬出には不安があったようだ。ドイツにも学んだ。その道の権威者太田半四郎氏に調査を依頼している。「……三十五度～四十七八度の急傾斜で林業の極度となるところにて、もはや容易ならざるを知るべきと。」

と報告書をだしている。

木材産地の先進地、富山の庄川で、鉄砲出しを完成していた。その越中ヒヨー（日傭）の川狩り集団にたよった。飛騨、木曽、四国徳島からも私人が入ったと言う。沢沿いは秋田式、越中式、鉄砲出しを駆使し、川沿いは、越中舟をしたがえて川狩りして下った。その数六百人、最高時は七九六人のヒヨー（山林労務者）が、かけ声を響かせ、汗を流した。東、西俣から島田向谷渡場まで約百六十キロ。川狩り日数百六十五日もかかったと言われる。越中で生まれた旧軍隊のように組織化された川狩り集団が、この大井川で最大規模に開花した。木材史上に残る大ドラマだったと、当時を知る者は語っている。――

（川狩りの詩、南アルプス大井川源流から。沢田猛著から）】

流送は、赤石沢発電所にでる。南アルプスには似合わない大きなプレハブのような建物が建っている。

昭和六十一年の大井川水利権更新のときに、中部電力静岡支社の所長さん（代理？）がみえて、私どもは通産省の指示に従って、事業を進めて参っておりますので、何かご要望があれば出来る

かぎり皆様のご意見に答えられるよう国に働きかけます』と、自信たっぷりに言っていたのが、なぜか思い出した。環境庁とか、山を愛する人にご意見を伺ったら良かったかも？上流の二軒小屋の発電所は景観に配慮されて良くなっている、と聞く。

　椹島に着いた。砂礫段丘に埋立地（捨土）も加わり、一ロヘクタールもあるかと思われる真平らな平地である。大正、昭和初期、木材切り出しの頃は、四十三棟の山小屋が立ち並んだという。これは大井川上流部最大の基地であった。今は、椹島ロッジ、東海フォレストの事務所宿舎が建っている。中央右よりに大きな道路が真っ直ぐにのびている。キャンバスを前に絵筆を動かしている若者のほかに、人影は三、四名みえた。夏の登山シーズンには、登山者であふれ、リムジンバスが行きかう、南アルプス第一の登山基地も、秋の平日は、静かな立たずまいと変っていた。

　小沢さんの案内で、大倉喜八郎翁の顕彰碑を見る。椹の木も植樹されて、地名のゆえんかと思われるが、裏山はなぜかアスナロウの植林になっており、右に曲がると井川神社があるようだった。

◇実業家大倉は、東京電灯会社、帝国ホテル、日清製油等を始め、四十を越える会社、団体を設立、旧満州や朝鮮にもその旺盛な事業欲を誇って進出した。一代で大倉財閥を築き、明治時代の資本主義の発達とともに生きたスーパーマンだった。南アルプスの豊かな木材資源の活用と共に、現在の水力発電も、触覚をのばしていった。大倉喜八郎は羽織袴で駕籠に乗り赤石岳山頂（三一二五m）に片手を高く上げて立った。（大正十五年八月）〔沢田猛著より〕◇

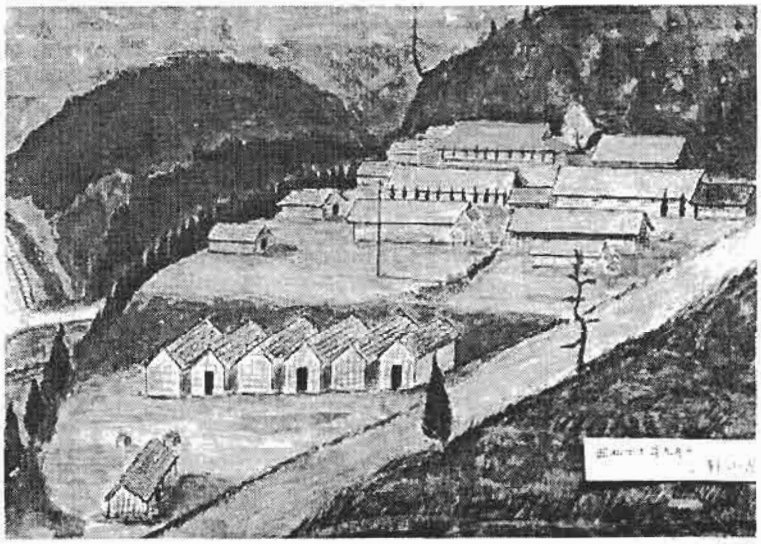


写真　昭和十七年頃の二軒小屋　原田耕作氏
絵写真提供

　二軒小屋へと向かう。橋を渡り、左岸を登る川原には、直径一メートルとも思われるフジアザミが岸辺に二、三、盛りを越した姿で咲いていた。標高は上っているのに、登り坂を感じなく高い地点まで来ている。北アルプスの上高地を訪れた時の風景と重なる所もあった。途中木賊と言う地名を通った。シダ植物から来た名前なのだろうか、それとも木のどろぼうが居ったのか？むずかしい地名である。十一時半頃、目的地二軒小屋に到着する。

　源流に不自然なのは田代ダムの放水の滝だった。意外と水量が多いように見えるが、滝状になっている為実際水量が判らないように感じる。道路より一ロメ

日本を代表する豪商紀文、実業家大倉が、五百人～一千人を動員してこの地に足を踏み入れ、事業を展開し、去っていった。今は何もなかったような椹島である。顕彰碑の前に立つと功罪は語らないでくれ、皆さん共有の自然として大切にしろ……そんな信号を発しているのではないか？と思った。

ートルほど登ると、砂礫段丘になっており、二、三ヘクタールと思わせる平地がある。芝生より少し延びた草が、ほとんど一面に覆っている広場の周囲には、丸太で作られたテーブル、イスが十脚ほど配置されている。少し高台に二軒小屋ロッヂが堂々と建っていた。広場のテーブルをお借りして昼食をとる。紅葉は少し早かったが、三千メートルの山なみの懐、谷間の広場、澄んだ空気のなかでの食事は実にうまい。

昭和八～十五年頃には三十棟もの山小屋が建ち、越中を始め各地から集まった益荒男が斧、鋸、ナタ、トビ等を携えて急斜面の大木に命をかけて挑んだ。六ヶ月～八ヶ月と、長い閉ざされたなかの過酷労働だった。その影の部分では、酒と女、賭博が身心をまさらし療した歓楽街（宿）もあったと言う。

時間がサないので、急いで上流へと登ってみる。田代ダムは"これ以上好奈はない"と思われる地形に造られている。

写真
二軒小屋付近の
大井川が蛇行して
いたので半島状に
つき出した山脚を
切り開いて、大井川を
まっすぐに通し、もとの
川原を、田代ダムにした。
滝状の上に田代ダムへの
取水口がある。

堰堤上の平地に東京電力の宿舎が建てられ、会社専用の車も停まっていた。

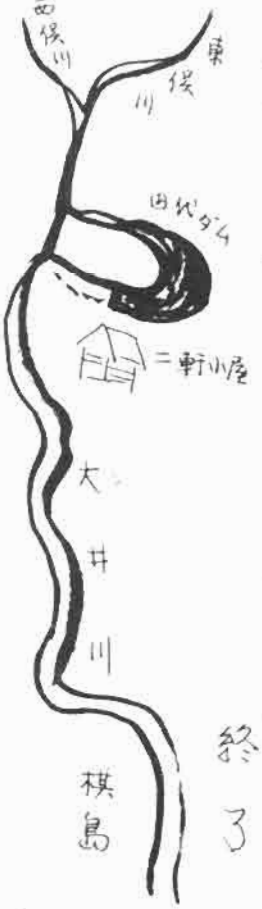
平たんな落ち葉の積もった林の中へ進むと、樹木の微香、秋の光、澄んだ空気、全体が鮮明にみえてくる。森林欲の効用はこれだな、と感じながら歩く。

橋を渡り二軒小屋トンネルをぬけると、東俣川、西俣川の合流地点である。（東俣川が大井川本流である。）更に上流に二軒小屋発電所が造られているが、時間が心配なのでここから引き帰す。東俣、西俣両川から流れる水は豊富できれいだ。限りない透明、水晶のようなさざ波が、波紋を繰り返しながら早い勢いで、流れ去っていく。

田代ダムの取水口の方へ廻ってみる。「こんなことをしても良いのでしょうか……」との声が聞こえてくる。約五トン（毎秒四・九九トン）の水量が、ブラックホールへ吸い込まれるように田代ダムに貯められ、早川発電所（山梨県）へ導水されている。ここに入った水は二度と再び大井川水系には帰ってこない。惜別の感情と人間の業を見る思いがする。

雄大で優美な大井川源流は、かつては木材を供給し、現在は電力供給と、持てる資源を贈り続けているのだ。と改めて感銘をいだきながら帰路につく。さわやかな疲れとともに、収穫の多い一日だった。

終了



東京のかたすみから（二十七）

❀テレビの始めから終りまで

トラ騒動の思い出

渡邊　寛夫

神奈川県警本部長の不祥事や、私の勤務していたテレビ朝日の隣りにあるTBS制作局長の痴漢行為などが、最近、話題になったが、このような報道がなされている間は、世の中は未だまともだな、と私は思っている。そして所詮、煩悩のなかに生かされている人間なんだから……と理解してもいる。

古い話だが、「鹿野山のトラ騒動」といえば、ああ、あれか、と思い出してくださる方も多いであろう。当時、私は、技術局報道現業部にいて、毎日のように発生する事件に追われていた。昭和五十四年八月三日、今日も何かがありそうだな、と思って出社した時であった。デスクの阿部副部長から「千葉県鹿野山の神野寺で飼っていたトラ二頭が、昨晩逃げ出した！」と聞かされた。われわれ報道中継担当は、事件の内容と発生場所を考慮して、大掛かりな出動準備態勢をとった。当時は東京湾アクアラインのような便利な道路がなかったので、報道中継車を神奈川県川崎から房総半島の木更津まで二時間かけてフェリーボートで運んだ。

その時、私は、三十二年前の「昭和の仁田四郎、渡辺哲雄、猪と格闘」という静岡新聞の記事を思い出していた。それは、昭和二十二年四月十日、私より五つ年上の兄貴分の「哲チャン」（現在、中川根町地名、株式会社藤原組会長）が、私の生家中尾の近くの中津川上流で猪と格闘して、押さえ込んだ、というものであった。

さて、報道現業部長という現場取材の責任者ということもあって、素早い初動態勢をとった。すなわち、他のテレビ局に先駆けて、真っ先に現場中継を成功させたいと意気ごんで、必要な人員、器材、費用（銭）などを確保し、事件現場の神野寺というお寺がある鹿野山に乗り込んだ。

実際にトラを捕らえる戦闘要員としては、千葉県警機動隊がライフル部隊三四〇人を編成し、大掛かりな出動をしていた。道路の要所要所に隊員を配置して、非常警戒体制をしいていた。一帯は禁足令がしかれ、学校は休校で、寺の周辺に人気はなく、民家は雨戸を締めピッタリして、不気味な感じがした。空き地やところどころの水飲み場には、トラをおびき寄せるための餌として串刺しにした肉を置いてあった。しかしトラの動きは全く見られず、村中が静まりかえり、この騒動は長引きそうに感じられた。その後一向に姿を現わさないトラに対する策として、私たち現業部は四人一組のチームをつくり、輪番の勤務体制をしいて、トラの現れるのを待った。

毎度のことであるが、報道中継が長期化すると、各テレビ局の中継現場の要員にとって一番の気がかりは、『何か食べるものはあるか、何を着たら耐えられるか、寝る所はどこにするか』などの衣食住の問題である。幸いにもこの時は、上長尾の「梅野屋」のような旅館があって、全面的に協力してくださり大助かりした。

さて、いつまでたっても敵が現れないとなると、時間のたつのが非常におそく感じられるようになり気もゆるんでくる。

千葉県庁から派遣された数人の役人が、我々テレビ朝日が確保した旅館の部屋の隣に入って来た。住民の保健衛生についての管理指導が目的のようであった。県庁職員としてはすべての準備、対策は完了し、あとはトラのお出ましを待つのみとなった「忙中閑」を感じたときだったと思う。

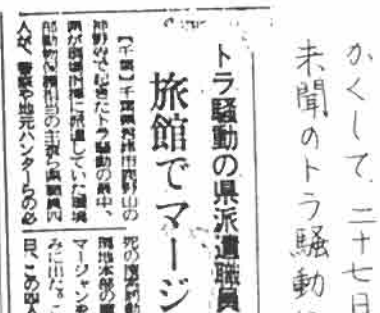
「一人足りない、一人足りない」と私たちの部屋に聞こえるぐらいの大きな声がした。そして『がチャ、がチャ』とマージャンのパイを出す音が聞こえた。そう言われれば彼等は三人組のようであった。

当時、私の勤務していた六本木のテレビ朝日の周辺にも、十数軒のマージャン屋があり、連日テレビ局員で賑わっているという、マージャン全盛時代であった。私は下手で、負ける事が多かったが、誘われると仲間に入ったり、進んで開帳したりしていた。そんなわけで、マージャンはメンバーが四人揃わないと、どうにもならないことをよく知っていた。だから、先の三人組の声に、ふと、その仲間入りをさせてもらい、一緒に時間潰しをしたい、という気持ちになりかけた。

しかし、時刻は昼少し前、テレビ朝日の二ュースの時間帯が間近にせまっており、仲間は現場でカメラ、マイク、マイクロ無線送信機などのセッティングをして現地レポートの準備中であることを思い、私の足は中継現場地点へ向いて、「トラ捜索二ュース」の放送の手伝いをした。

脱走三日目に、メストラが地元ハンターに射殺されたものの、残るオストラは二千八百人による大捜査陣の包囲網の目をかいくぐって逃げまわっていた。八月二十八日の深夜、このオストラが民家の犬を殺して骨を食べ残したことから足がつき、千葉県警が付近の山中でこのトラを発見し、射殺した。

かくして、二十七日間におよんだ、わが国における前代未聞のトラ騒動に終止符がうたれた。



トラ騒動の県派遣職員

旅館でマージャン　4人処分

【千葉】千葉県茂原市鶴枝山の開発地本部の置かれた旅館で、かけマージャンをしていたとみられる県職員四人が、同県警茂原署から、同県生活環境部から処分された。この四人は、開発部自然保護課主査（四五）と三五歳（厚生労働省の職員）の二人が懲戒処分を受けた。

トラ捜索中にマージャン

職員四人を訓告

千葉県

朝日新聞 1954年8月31日より

それから三日後、八月三十一日（金）の読売新聞と朝日新聞の全国版に夫々「トラ騒動の県派遣職員、旅館でマージャン」、「トラ捜索中にマージャン、千葉県職員四人を訓告」と報じられた。

私も一歩間違えば、「緊急中継放送中にマージャン」と、テレビ朝日の社報ぐらいにはのり、話題のネタを提供したかも知れない。魔がさす時のタイミングや状況などが、なんとなく解ったような気がした。

この長期に及んだトラ事件は、後世に残る幾つかのエピソードを生んだ。それについては次回をご期待ください。

読売新聞 1954年8月31日より

付記

二〇〇〇年一月二十一日記

仁田忠常（一二六七～一二〇三）平安、鎌倉前期の武士。仁田四郎と称す。伊豆仁田郷（田方郡函南町）の住人、新田とも書く。北条時政に疑いをかけられ滅ぼされた。

伝承として「曾我物語」巻八「富士野の狩場への事」によって源頼朝の面前で猪に逆さまに乗ってしとめたと云う。忠常の勇猛ぶりは知られているが、この猪は実は山神であり、その祟りで忠常は謀反の疑いをかけられ討たれたとある。

ウンカとお茶

中道正巳

昭和二十五、六年頃と思いますが、徳山の実家の周りの茶畑にウンカが大発生した事がありました。当時中学生でしたが、茶摘みが始まる直前のことでした。今は如何か知りませんが、当時は茶畑でよく見かけました。

ウンカは稲の一番の害虫ですが、大陸から風に乗って飛来するといいます。羽根のない黄砂が運んでくるのですから、不思議ではないのですが。

ところが昨年NHKのテレビで、台湾の北部、文山という地方の茶農家の人々は、このウンカの発生を神頼みのようにして待っている、という番組を見て、びっくりしました。『ウンカが発生した年は最高品質の茶が収穫できる』というのです。

この事は昔からの伝承ではなく、ある年ウンカが発生し、思うような茶ができず、その年の茶は、あきらめていたが、その茶を、ある英国人が見て、形状が紅茶に似ていることから、味を調べたところ、果実のような香りがする最高の茶、と評価したのです。それ以来『東方美人茶』として世界中に知れ渡った、というのである。

この番組は、高級茶つくりに取り組む一人の青年をテーマにしたドキュメント番組なので、ウンカが発生した年の茶だけが東方美人茶なのか、この地方のものをそう呼ぶのか分からないが、一度飲んでみたい、とネットで調べることにしました。台湾の茶販売店にアクセスするのが一番良いのですが、中国語は分からないので、翻訳サーフィンが使える英国にしました。

英国には世界中のあらゆる種類の茶が集まります。ホームページの内容も各社丁寧で、茶の説明や最新の情報が掲載されています。

茶の種類に関係なく共通することは、名産地と云われる所は、どこの国でも濃霧の発生があること。中国本土のウウロン茶の産地、福建、広東省では、工業化が進み、都会に出る人が多く、手揉みの熟練者が少なくなり、良質茶が減少していること、など。

福建省の段々茶畑。
等高線状に植えたお茶は、収穫量も味も良いといわれます。

中道さんの年賀状より。

今年は4百年に1度の特殊な閏年
2千年問題（Y2K）は2月29日に一部の家電製品旧型のビデオとFAX機に発生する恐れが有ります。何よりもY2Kを騙る詐欺に御用心！　　総理府ホームページより

また日本の緑茶についても詳しく掲載しています。日本三大名産地について、日本では、煎茶を対象にして、福岡八女郡・京都宇治に続いて静岡川根が入っている本も有りますが、英国では岡部町だけで、かなしいかな川根茶は有りません。抹茶の主な生産地、愛知県の西尾なども紹介しています。日本の茶販売店のホームページでは、あまり掲載されないこれらの記述は、英国人が本物のお茶好きだからでしょう。

残念なことに東方美人茶については英名が分からないので、知ることは出来ませんでした。しかし、後日台湾茶の直営店が東京にあることが分かり、東方美人茶を入手することが出来ました。別名をカタカナで、オリエンタルビュウティ、と書いてありますから英名かもしれません。

この店では文山地区の茶を自社ブランド香檳鳥籠茶として販売しています。また、仕上げ茶の形状で芽が白いことから、白毫の銘もあること。驚くことは急須の中を見ると、茶葉がほとんど一芯二葉で手揉みです。（一つ茎に芽と第一葉、第二葉）　ほとんどというのは、なかに一芯二葉に見える一芯三葉が有るからです。この摘み方は熟練者でないと、なかなか出来ません。緑茶では玉露の場合この摘み方です。茶摘みの経験がある方なら一芯二葉で摘むことが、どんなに難しく、また贅沢なことかお分かりかと思います。この茶に携わった人々の仕事ぶりが良く分かる、そのような茶でした。

静岡市在住・徳山出身

編集室より

中道さんから寄稿文が届きました。コンピューターに堪能な方ですので、原稿も整然とした原稿用紙に打ち込まれたものでした。

内容を読んでいくうちに偶然として、何とも言えないせつない気持ちになりました。

◎ウンカが発生した年は最高品質の茶が収穫出来る……ウンカはおろか、虫が生息出来る茶畑はどこにあるのだろうか？農薬を使用しない茶畑は川根茶産地にどれだけあるというのだろうか。

◎名産地と云われる所は、どこの国でも濃霧の発生があること。大井川に沿々と水が流れていた頃、寒い冬の朝は気温と水温の差が激しいので、水面から湯気（水蒸気）が立って向こう山が見えないほどの濃霧におおわれた。霧はやさしく茶の木や樹木をおおって、寒さと乾燥から守ってくれていた。大井川の水が流れなくなってから（導水管を通るようになってから）川霧は消えてしまった。

◎茶葉がほとんど一芯二葉で手揉みです……。今とき、手摘みなんか、やっていられない？大型共同製茶工場は沢山の補助金をもらって、あちらこちらに建って短時間に沢山収穫して、早く終らんといかんで。早いお茶ほど値が高く、終りごろのお茶は半値以下だで。五月の連休で片づけにゃあ、しょんないだ――」手摘みの一芯二葉そして手揉み、それは天皇様への献上茶か品評会用のお茶かも知れない。

私の子供の頃、お茶時になると、大人も子供も茶畑へ出て茶摘みをやったものだった。一週間位茶休みもあった。機械化大量生産になって、茶畑の形態も変わり、茶畑から子供の声

も人影もめっきり少なくなった。この節「○○学校の生徒が○○さん方の茶畑をお借りして、茶摘み体験学習をしました。茶産地として、あるべき教育の姿だと考えます」などと言う新聞や広報が見られますが、すっかり変わってしまったなあ―とつくづく思います。

この頃の茶畑は、葉も大きくよく肥えたつやかな緑色です。たしか、昔の新茶は黄緑色だったと思います。新芽も、煎れたお茶も緑色に変わって来ています。

ことしの春の訪れはおそく、桜の花のつぼみもふくらんでいません。普通なら花が咲き、温かな風が吹きます。諺に、桜のおそい(花)年は、お茶は早い。とあります。ことしはどうでしょうか。

桜の花ばかりでなく、全ての植物が寒く長い冬によって、開花も芽吹きもおくれています。しかし、春は日に日に近づいていて、ダンコウバイもキブシも咲きました。川端の柳もようやく黄緑色に変りました。これから里も花盛りとなると思います。

杉花粉は今年は例年の三倍とか、一月末から現在まで飛びかっていて閉口しますが、冬の間の酸素の供給源としても、針葉樹林のはたす役割は重要なものがあります。春を迎える関門としては、ちょっと厳しいのかも知れませんが、花粉アレルギーの方、頑張って下さい。

上長尾診療所の羽根田先生が転任されました。六年間の地域の住民の保健に尽して下さいましたこと、感謝申し上げます。新地での活躍をお祈り申し上げます。そして、しばらくの間は、診療所は閉鎖されるという事です。元気な町民が多いとは申せ、高齢者の町です。地域医療のはたす役割は、大変大きいものです。一刻も早く、お医者さんに来ていただいて、安心できる、住みよい町になってほしいですね。又、消防署の救急車出動回数が異状に多くなっている地域でもありますから、これから先、増々出動任務が多くなるのでは、と懸念されているようです。

五月上旬、大札山のアカヤシオは、ことしも美しく咲くでしょうか。例年、四月下旬に満開となり、多勢の人が、かれんな花に逢いに来てくれます。半月おくれで、芽吹き、開花がやって来ていますが、花見ハイキングをなさる方は、私方でも、役場でも、情報を聞かれた方が良いかも知れません。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共　200円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行（季刊誌）を予定しております。今回で購読の切れる方と、始めてふる里通信をご覧になられる方には郵便振替用紙を同封致しますから、引き続きご購読をよろしくお願いします。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも、是非ご連絡下さい。

- 郵便払込通知票番号　00870-4-81556
- 加入者名　中川根ふる里通信係
- ふる里通信に関する問い合わせ先・及び
- 発行責任者　〒428-0313
  静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6
  小沢節子
  TEL. 0547-56-0015

中川根町役場産業課 TEL. 0547-56-2226.